

なる様になる迄だ

いろいろ、考えもする。

控え目か、強引な態度で進むか。
紳士か、獣か。

自分の対応の仕方をいろいろ想像し、
それに彼女がどう反応するか。

僕の頭の中はぐるぐる回っている。

天守閣に登っても、
自分の目の網膜に映っている像が、
僕の脳裏を刺激しても、
僕の脳裏の視覚ゾーンには、
もっと鋭い、この前の記憶の映像が、
もっと明るい光で
ギラギラと映しだされている。

彼女の髪の毛が黒く光るのが、まぶしい。

いつの間にか、僕は皆について、
フェリーボートに乗り換えていた。
船が揺れるので、ふと我に帰り、
僕は、自分の船酔いの心配をしだした。

しかし、どうもなかった。

昼飯が出た。
やはり無駄がある、好き嫌いがある。